

第7回講義

ウェスレーの聖餐論

宣教のわざとしての聖餐

①回心の恵みの手段

- 先行する恵みを見出せなくなった者や罪が赦されたという確信を失った者が、聖餐を受けることにより回心を与えられ、信仰復活の手がかりを掴める場
- 名ばかりのキリスト者が聖餐を通して、真実のキリスト者として、再び信仰の道を歩み続けることができる

②確信を与える恵みの手段

- 信仰の位置（義認）を永続的に確認する場
- 信仰の原点である信仰義認に立ち返る。生涯かけて神の救いと愛を確認する場が必要なのである。

- それ故に、神を喜ばせようという望みを持っている者や自分の魂を愛する者は、神に従い、**出来る限り**聖餐を受けることによって、**自分自身の魂の徳を調べなさい。**
- さらに1787年に、ウェスレーは聖餐に**絶えず**与ることを強調 聖餐受領者の数は増大していた。「誰も空虚な心でその場を立ち去らなかつたと信じる」と日誌にある。6時間聖餐式にかかる記述も存在
-

|| ウェスレーの聖餐論のルーツ

● 1 祭壇の神学

- 神は真に祭壇に臨在し、そこで霊的な交わりが生まれる。祭壇では、「神が我が必要としているすべての祝福を提供してくれること」が起こる。
- 「恵みの座」 恵みの座は本来聖餐において神に招かれて跪き、聖餐を受ける場。（礼拝堂の中で占める位置の重要性） Communion Railの重要性

2 犠牲の概念

- 赦されたという永続する状態は、聖餐の恵みによって新しくされ、實際生活に適用されてこそ現実のものとなる聖礼典の目的は**キリストの死をパンを食し、ぶどう酒を飲むことにおいて続けて想起する**」（アナムネーシス）キリストの犠牲による罪の赦しが起こることの確認の場

3 参加の概念と新しい命の付与 (Participation)

- キリストの受難劇としての聖餐
- 我々は、他の聖餐受領者と共にキリストの受難の目撃者となり、キリストの苦しみを実感する時に、聖餐において、キリストとの生きた交流 (communicatio) が起こる。
- 生活の変容が起こる。

4 神秘的な神の臨在の教理 (Real Presence)

- 聖餐は「われわれの宗教の偉大な神秘である」と語った。
- キリストの体は量的に理解できないし、ある場所にのみあらわれるものではなく、また、ツウィングリの言うように象徴的に現われるのではない。その現れ方は神秘的であるとした。
- **これこそが、**
- **今日のメソジスト教会の特色**

5 聖餐と聖霊の教理

- 聖餐は聖霊の働きの個人への深い働きかけにより成り立ち、聖餐受領者が御霊の実と喜びを受け取ることが起きる。そして、この聖霊の働きが一度限りのキリストの業を今、ここにおいて有効にする。
- エピクレシスの祈り
- 聖餐時の祈祷：「聖霊よ来たり給え、汝の感化を及ぼし、パンに入れられた命、ぶどう酒にある力のしるしを実現せしめ給え、これらのバツジが効果的であることや天の芸術によって作られていることを証明し、私たちが忠実な心で愛を伝えるチャンネルに合わすことができるようにし給え」

1. 回心の恵みの手段としての 聖餐

- モラヴィア派との相違 ウェスレーは、静寂主義に反対した。恵みの手段を使用することがない人は、赦しの確信を失い、赦しを一度も得たことがないように感じてしまう。信仰に生きることなく、生涯罪人であり続ける。
- モラヴィア派は、清い心を持たない限り、恵みの手段を使用する必要はない。→聖餐に与れない。

モラヴィア派に対する一つの 疑問

- 恵みの手段を使用せず、信仰の程度の相違を認めないことへの疑問。特に、信仰の確信のないものとして、聖餐式を受けられることを拒絶される。
(1738.7.4 回心後)
- その後モラヴィア派との決別

1738年7月4日、マリエン ブルン

- ジョンは、モラヴィア教会から「疑いを抱いているために平安がなく、休みなく揺れ動いている信仰者であって聖餐を受ける資格がない者(homo perturbatus)」として聖餐を拒否されたのである。
- 生涯にわたって彼ほど聖餐を重視し尊重した人物も少なかった。彼には一大事だったと思われる。
- 信仰が弱められたり失った人は誰でも、聖餐を受けることによって救いの信仰に戻ることができるという事実を発見した。

真実のキリスト者(Real Christian)になる
ことが目標

不信仰の者は聖餐に与るべし

- 不信仰とは信仰者でありながらも、
- ①**克服する信仰(Conquering Faith)**
を持っていない人
- ②罪への束縛の状態にあって、継続的
に戦ってはいたが勝利を得ていない状
態
- ③**未だ、真実のキリスト者でない人々**
- **のこ**を意味した。
- **未信者**ではない。

先行する恵み

- ウェスレーは「**主の晩餐は先行する恵みを伝える**」と語る
- この意味は何なのか？ 全ての人を招くことにつながるのか？
- **ステーブルスの結論：重要なのは信仰の程度(Degrees of faith)の存在**
- たとえ、その人が先行する恵みを失っていたとしても、**からし種の信仰**は取り去られておらず、たとえ、信仰が弱められていたとしても、主の晩餐のテーブルで、先行する恵みを再び受け取り直すことができる。

**聖餐受領者は、祈禱と自己準備で
聖餐に備えることが期待されていた。**

- ウェスレーが聖餐に回心の機能を与え、
初めの愛に戻ることを強調したことには、
当時の名目的クリスチャンに対して
初めの愛に戻るというウェスレーの
メッセージ

結論

- ウェスレーは聖餐を「永続的な信仰義認の場」（常に罪人として主の御前に遜り、主の赦しと愛を受ける場）として見ていた
- ウェスレーにとって聖餐にあずかることは、自分をキリストの前に差し出し、罪人としての自分を見つめ、神の赦しと愛の中に自分を浸すというキリスト者の内的いのちの源泉

宣教のわざとしての聖餐の適用

- ①多民族から構成される会衆を創出し、小岩教会の会員が聖餐を中心とした礼拝を守りながら、多民族の牧会をいかに、そして、どの範囲まで理解し実現することが出来るかを明確化する。
- ②小岩教会を囲む多民族共同体に対して、キリスト教の礼拝に参加する機会を与え、会衆が効果的に宣教を行っていける方法を発見する。

福音としての聖餐理解

- 私たちはこの聖餐のテーブルに自分の義を信じて厚かましくも聖餐にあずかりに来ている者ではありません。ここに来ることができるのはただあなたの多くのそして偉大な恵みによるのです。
- 聖餐のテーブルとは、メソジストのテーブルのみではなく、**主のテーブル**を意味する。そこでは主に会うことが起こる。ウェスレーは礼典を福音そのものとして見ていたと言っても過言ではないと信じる。聖餐を福音として提示したウェスレーの貢献は大きい。